

琴線 全歌

森野 水琴

令和七年 二〇二五年八月
青白き 光に今宵 寄り添えば
薄紫の 祈りとならむ

令和七年 二〇二五年七月
青白き 光を浴びた 切なさに
ただ泣き濡れて 想う心よ

令和五年 二〇二三年十一月
青み増す 薄紫に 祈りつつ
時の女神よ 逢わせたまはむ

令和七年 二〇二五年十二月七日
詠み人知らずとの共作
上の句は詠み人知らず

あかね色 恋し頬色 きみ想ひ
青き月夜に ときめき響く

令和七年 二〇二五年八月
茜さす 薄紫に 身を寄せて
新たな光 照らす我が身よ

令和五年 二〇二三年十一月
赤み増す 薄紫に 色づきて
逢いし喜び 心に沁みる

令和四年 二〇二二年十一月
秋の夜を しおり片手に ほほえみて
ふみ読まむかな 果てるともなく

令和七年 二〇二五年六月
明け方の 忘れな草に こと寄せて
文ふみにしたため すぐに届けむ

令和五年 二〇二三年十二月
あさぼらけ そよ吹く風に 揺れながら
舞い続けるや 草の白露

令和四年 二〇二二年六月
暑き日に よみがえるのは 伊予の味
懐かしみつつ 心なごまむ

令和五年 二〇二三年七月
雨あがり 眺むる空に かかる虹
さだめの道を ともに歩まむ

令和四年 二〇二二年四月
雨の音 窓越しに聞く 夕暮れに
明日は晴れよと ひとり祈らむ

令和六年 二〇二四年六月
雨の音 止みて明けたる 空見れば
虹の架け橋 光り輝く

令和七年 二〇二五年八月十五日
柗木 湊さんの『純情流転』に ひびきさんが応募した歌への返歌
応募歌
姫百合に 糸を引かれし すがれ虫
つひに見上ぐる 有明の月

返歌
有明に 今ひとたびの いとなみを
糸たぐり寄せ 続けられました

令和五年 二〇二三年九月
生き急ぐ なかれと風に 教えられ
力をために しばし休まむ

令和六年 二〇二四年七月
いくたびも 体に傷を 受けるとも
心磨いて 立ち直るらむ

令和四年 二〇二二年三月
異国へと 窓を開きて 聞きながら
はるか遠くに 想い寄せなむ

令和四年 二〇二二年一月
いてつく空に 陽が射して 暖かくなり はずむ言の葉

令和七年 二〇二五年十一月十日
ココア晴彦さんの『短歌』への返歌
三頁の歌
ココアでも 飲む？と友ら言い ぼけながら
昼寝している われ聞きにけり

返歌
うたた寝の さめた我が身に 心地よく
潤いゆくは 心の渇き

令和七年 二〇二五年八月
うたを返すは 公家のたしなみ
震えるままに あてやかに

令和四年 二〇二二年六月
美しき 文字で書かれた 知識ゆえ
真似て書いては 渇き潤す

令和四年 二〇二二年三月
美しきもの 美しいと言う あなたこそ 美しい
それが分かる 私もまた 美しい
それだからこそ 私たちは 美しい
この輪広げて 皆美しき 世になることを
ひたすら願う

令和四年 二〇二二年八月
美しく したためられた 言の葉を
書き写しては 沁みさせむ

令和四年 二〇二二年十月
海へだて 異国の島を 眺めれば
間近にせまる 恐れにも似て

令和五年 二〇二三年九月
うららかに ひざしを浴びて 咲き誇る
秋の桜が 微笑み揺らぐ

令和五年 二〇二三年四月
おだやかな 春の光に 揺れながら
鳥の巣立ちを 見て微笑まむ

令和七年 二〇二五年三月

おだやかな 日ざしを浴びて 咲く花の
ほほえみを見て 心なごまむ

令和七年 二〇二五年十一月十日

ココア晴彦さんの『短歌』への返歌
二頁の歌

隣人の 声に亡き父 思い出し

しばしの間 考えてみる

返歌

思い出の 声にことよせ つれづれに
折にふれては ともに語れよ

令和七年 二〇二五年十一月十日

ココア晴彦さんの『短歌』への返歌
一頁の歌

時計とは 何と不思議な ものだろう
時には支配し 時には追われる

返歌

思いわび 眠れぬ夜を 過ごしてや
まぶたに浮かべ 時のまにまに

令和五年 二〇二三年二月

降りてきた 人の言の葉 聞きながら
忘れた響き 想い出さなむ

令和五年 二〇二三年二月
おん前で 友と舞いたり あてやかに
天も喜び ひとすじの雨

令和六年 二〇二四年九月
風薫る きんもくせいを 運びつつ
実りの秋を 知らしめるらむ

令和六年 二〇二四年六月
風薫る そよぐ言の葉 ことほげば
ほほえみながら 心和まむ

令和六年 二〇二四年十月
風薫る 友を天へと いざないて
残れる人を 我は育てむ

令和六年 二〇二四年七月
風薫る 花の都に あてやかな
競いし者の 夢叶うらむ

令和六年 二〇二四年三月
風薫る 春の訪れ 愛でながら
あふれる想い したためるらむ

令和四年 二〇二二年十月

風に舞う 波の華こそ 咲き誇れ
つかの間にとは 思わぬほどに

令和七年 二〇二五年十二月三日

口に含んで 甘くするから
唇かさね 飲めばいい

令和七年 二〇二五年八月十五日

柗木 湊さんの『純情流転』に 笹乃さんが応募した歌への返歌
応募歌

雲の間に 見えし愛しき 名を呼べば
つひに見上ぐる 有明の月

返歌

雲井との 交わす言の葉 聞きながら
なおも誘わむ わが赤糸に

令和六年 二〇二四年十一月

倉の戸を 開けてまばゆい 光浴び
見上げる空に 虹の架け橋

令和七年 二〇二五年八月十日

柗木 湊さんの『純情流転』との共作
暗闇に さまよう人を いくくしみ
つひに見上ぐる 有明の月

令和四年 二〇二二年十一月
 声出さず 言の葉のみを 響かせて
 聞こえるがまま ただしたためむ

令和四年 二〇二二年四月
 心こめ したためてこそ 美しい
 文字に寄り添い 更けていく夜

令和七年 二〇二五年十月一日
 柗木 湊さんの『曇り咲き』に 笹乃さんが応募した歌への返歌
 応募歌

明日を見て 仰せし暗雲 空くうつかむ
 時に寄る波 この黎明に

返歌
 子とともに 天に召される その命
 貫き通す もののふの道

令和四年 二〇二二年一月
 言の葉が 天から降りて くるように
 すらすらと ただ すらすらと したためむ

令和六年 二〇二四年九月
言の葉に 月の光が ほほえみて
内から磨く 光とならむ

令和六年 二〇二四年十一月
言の葉に 月の光を 受けながら
つどいし者が ふみ したためむ

令和五年 二〇二三年九月
言の葉の 続きをいつも 待つ友に
降りてきたりと すぐに届けむ

令和四年 二〇二二年三月
この雨は 天と心を 結ぶ水
渴き潤し よみがえらせむ

令和七年 二〇二五年六月
この声が 届けばよしと 祈りつつ
震え泣く夜の 心の響き

令和六年 二〇二四年一月十九日
このごろは 人の心も 和らぎて
ともに遊ばむ 時のまにまに

令和七年 二〇二五年二月
この花を 守りたいとて 通う日々
また来る春も 咲き誇らせむ

令和七年 二〇二五年八月四日
柗木 湊さんの『花の散るらむ』との共作

この世での 逢いし喜び たずさえて
道行きの果て 花の散るらむ

令和七年 二〇二五年十月二十二日
今宵あなたと 逢えるのならば
かわいた心 抱かれない

令和七年 二〇二五年九月
今宵また 忘れな草に こと寄せて
ふみ読む月を 重ねあわせむ

令和七年 二〇二五年九月八日
柗木 湊さんの『うそつきウイルス』との共作
咲き誇る 花ながめても 夕闇の
桜月夜に なほ春を待つ

令和六年 二〇二四年四月

咲くまでの 期待ふくらむ つぼみ見て
今か今かと 日も暮れるらむ

令和七年 二〇二五年七月

笹の葉が 言の葉となり ことほぎて
すみれの間にも 琴音のひびき

令和六年 二〇二四年十月

さてもこの 神無月に 天に召される 人の残した
恵みをみなで 育みたまえ

令和四年 二〇二二年二月

さても この 弥生の美空に
仲睦まじき ふたりの 今日はお披露目
願わくは とこしえに 互いの魅力を
心いくまで 引き出し給え

令和七年 二〇二五年十一月

淋しくも ときめくがまま 夜ごと舞う
朝までもとは 言うまでもなし

令和七年 二〇二五年十一月

静けさに ふけゆく夜に ひとり詠む
新たな響き とわに輝け

令和四年 二〇二二年八月
したためた ふみのゆらぎに なごみつつ
そこはかとなく 夜も更けなむ

令和七年 二〇二五年八月
忍ばずに 色に出にけり この想い
青白きまで 薄紫に

令和四年 二〇二二年一月
白い紙 黒い文字 無限の世界 したためむ

令和四年 二〇二二年一月
澄み渡る 夜空に光る 月見れば
我が心にも 沁みる言の葉

令和七年 二〇二五年三月
そよ風が 運ぶ調べに 耳を立て
より生き生きと はずむ心よ

令和四年 二〇二二年二月
そよぐ風 木の葉を奏で 揺れながら
ささやくように 耳を潤す

令和七年 二〇二五年八月十五日
柗木 湊さんの『純情流転』に 佐々 琴音さんが応募した歌への返歌
応募歌
さんざめく 波にまぎれた うたかたよ
つひに見上ぐる 有明の月

返歌

そよぐ風 たたずむ人に 香を運び
待つ身の思い 忘れな草に

令和六年 二〇二四年七月
たおやかに さらに和らぐ 言の葉が
今ひとたびと 包み込むかな

令和五年 二〇二三年二月
手のひらに ひとひらの雪 舞い降りて
さもひそやかに ささやきかけむ

令和四年 二〇二二年八月
天から降りた 言の葉を したためて
声に出しては 天に届けむ

令和四年 二〇二二年八月
天に祈る 言の葉が舞い 羽衣を
まとう天女も ほほえみ行かむ

令和四年 二〇二二年三月

天も泣き ひとすじの雨 舞い降りて
心の泉 琴を奏でむ

令和七年 二〇二五年十二月三日

ときめきが 背を伝いつつ じっくりしみ
あかねの空に ひびきわたらむ

令和七年 二〇二五年十二月七日

詠み人知らずとの共作
下の句は詠み人知らず
ときめきが 背を伝いつつ じっくりしみ
指からませて 愛はふくらむ

令和七年 二〇二五年一月二十二日
初めに詠みし歌

時を越え 天にも届く 言の葉は
晴れやかなりと 夢に見るらむ

令和七年 二〇二五年一月二十二日

えいしんか
詠進歌

時を越え 天まで届け 言の葉よ
睦月の美空 夢叶いたり

令和七年 二〇二五年九月

長からむ 葦のもとにぞ 垣間見る
素顔のままの 夜の静けさ

令和四年 二〇二二年六月

懐かしき 器に蒸した きょうの品
我を忘れて 味わうほどに

令和四年 二〇二二年三月

夏までの 樂しみとせよ 伊予の味
暖かき汁 知る人ぞ知る

令和四年 二〇二二年二月

名も知れず 流れる川の せせらぎに
耳を傾け しばし たたずむ

令和七年 二〇二五年七月

悩みつつ 震え泣く夜の ひとつころ
みそひともじで つかみとるらむ

令和七年 二〇二五年十二月

西の地に 水の琴をば 響かせて

駆け抜けるかな 夢の大和路
やまとじ

令和七年 二〇二五年五月

二年ぶり 神田の神輿みこし 担かつぎ見る

乙女の涙 心を洗う

令和六年 二〇二四年三月

庭見れば 花咲き誇り あげは舞う
のどけき日々に 心和まむ

令和五年 二〇二三年五月

激しかる 雨降りしきる 音を聞き
静かに響く 琴を待つらむ

令和七年 二〇二五年七月

肌に触れたら 罪になるなら
心に触れて 愛とせよ

令和七年 二〇二五年十月二十二日

冷え込む夜に 出逢ったからは
もえる心で あたためむ

令和四年 二〇二二年四月

美と書いた つもりが何故か いまひとつ
線が足りずに なおも励まむ

令和七年 二〇二五年二月
人知れず 咲く花を愛で 和む時
また逢いたしと 思う心よ

令和四年 二〇二二年一月
人しれず 眺めしままと 気がつきて
心の窓に ささやきかけむ

令和七年 二〇二五年十月十八日
西令草さんの命日に詠める

ひととせの 時のまにまに したためし
文を捧げむ 天の友へと

令和五年 二〇二三年三月
ひと冬を なごりおしみて 降る雪も
巣立ちをめでて 花となるらむ

令和七年 二〇二五年十二月二十三日
『新たな響き』が千スタ―獲得 キリ番のエステル瑠璃さんとの共作
上の句はエステル瑠璃さん
響く歌 心の中に 抱きしめて
瑠璃の輝き 天まで届け

令和四年 二〇二二年十二月
響く音 したためた本 読みながら
しおり握りて ゆらぐ心を

令和七年 二〇二五年十二月
吹く風の 寒さに負けず 燃えさかる
熱き言の葉 心の響き

令和七年 二〇二五年八月
文を送りて 届かぬ時は
自ら走り 馳走せよ

令和六年 二〇二四年十二月
星に向け 贈るまなざし 和みつつ
人を励まし はぐくむ心

令和五年 二〇二三年四月
舞い降りる 桜吹雪に 身をまかせ
輝く道を 友と歩まむ

令和四年 二〇二二年三月
また一つ 異国の人の 言の葉を
学び始めて ともに励まむ

令和六年 二〇二四年十一月
待ち焦がれ 訪ねし海は 夕暮れの
赤と黒とに 波が泣くらむ

令和四年 二〇二二年四月
待ち焦がれ 夏まで待てぬ 伊予の味
満たしたあとの 茶と楽しまむ

令和五年 二〇二三年五月
待ちわびた 祭り賑わい 華やかに
初顔合わせ 友となるらむ

令和七年 二〇二五年八月
待つことの 長きに耐えて なおも待つ
夜もいよいよ 長くなるらむ

令和四年 二〇二二年八月
窓に射す 陽のまばゆさに ときめいて
新たな朝を きょうも迎えむ

令和五年 二〇二三年十二月
窓の雪 そこはかとなく 降りつもる
しおり片手に 響き聞くらむ

令和四年 二〇二二年十一月
窓辺にと 寄り添う人の 面影に
懐かしみては 秋も暮れなむ

令和四年 二〇二二年八月
窓を打つ 雨の音にも 驚きて
まだ明け初めぬ 空を眺めむ

令和六年 二〇二四年七月
見上げれば またたく星の かなたより
贈られしもの 心に沁みる

令和七年 二〇二五年九月二十七日
柗木 湊さんの『曇り咲き』との共作

見渡せば 風のまにまに 雲走り
時に寄る波 この黎明に

令和五年 二〇二三年四月
見渡せば 満開の花 咲き誇り
人の心も 桜に染めむ

令和五年 二〇二三年一月十八日
巡りあい 久方ぶりの 喜びに
妙なる調べ 友と聞くらむ

令和五年 二〇二三年七月
森にあり 野にもありなむ 水の琴
天高くまで 奏でられたし

令和七年 二〇二五年七月
もろともに 凜とたたずみ 光浴び
なおも進まむ たゆむことなく

令和七年 二〇二五年十二月三日
病なおして 逢いたいものを
薬にがくて 飲めやせぬ

令和七年 二〇二五年八月
やまとうた 下から上に 詠み上げて
新たな風を 吹きおこすかな

令和七年 二〇二五年八月
やまとうた ひとり浜辺に たたずみて
新たな響き 波のまにまに

令和五年 二〇二三年十二月
やまと歌 文と音とを 友として
琴の葉奏で 文の花咲く

令和六年 二〇二四年九月
やまとうた 森にも野にも ひびかせて
水がかなでる 琴となりけり

令和四年 二〇二二年十月
やわらかき 筆の運びに 酔いながら
したためていく 時のまにまに

令和七年 二〇二五年九月
夕闇に 映える翼を 並べ飛ぶ
つがいの鳥を めでる心よ

令和六年 二〇二四年四月
夜がふけて 風がささやく 言の葉に
月の光が 降りてくるかな

令和四年 二〇二二年一月
夜もふけて 耳そばだてる 静けさに
雪の白さも 窓に映らむ

令和七年 二〇二五年五月

わが文を ふみ 読む声を聞き 微笑みて
さらに続きを したためるかな

令和五年 二〇二三年三月

別れても 互いの幸を 祈りつつ
また逢わむとぞ 友に誓はむ